
私の初恋。

blackcat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の初恋。

【Nコード】

N0571Q

【作者名】

blackcat

【あらすじ】

私は、雨に打たれていた。
気を失いかけていた私の目に、人影が映った。
手を、伸ばした。

第一話。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ねえ、どうしてだろう。

君じゃなきゃ、駄目なんだ。

一人では、壁が大き過ぎるよ。

一緒に、登ろう。

二人で、二つの足跡。

付けていこうね。

“ユメ”と言う名のゴールまで。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ザアア……

雨が、降っている。

冷たい、雨。

私の今の気分に、ぴったり。

そう、思い乍ら、雨に打たれる。

ふと、雨を見上げた。

グラッ

私の目の前が、急に歪む。

…あ、あれ？か、身体に力が……

私は、ズルズルとへたれ込んでしまった。

そして、そのまま、倒れてしまった。

此所は、誰も通らない、寂れた商店街。

私の事を、見てくれる人なんか、いない。

東京、とは言え、誰も知らない、道。

助けて、と声を出しても、此所は、廃墟同然。

原宿とか、渋谷とか、直ぐ、近くなのに。

「……っつ。だ…れか…」

小さな、小さな声。

意識が遠のく中で、声を振り絞る。

ザ、ザアア……

雨が、一層激しくなった様に、思えた。

第二話。

そんな中、バチャバチャツ、と誰か駆けてきた。

朦朧とする意識の中で、目の前に人が居るのが分かった。キャップを深くかぶっていて、顔がよく見えない。

「大丈夫ですか！？しっかりと下さい！！」

其の人は、私に声をかける。

けれど、私は、朦朧とする意識の中で、理解が追いつかない。

「助けて……」

「そう言い乍ら、其の人の手を握る。」

あ。あつた
温かい。

其の手をギュツと握り締めて、意識を失った。

俺は、渋谷でのコンサートを終え、一人で傘を差しつつ、ファンから逃れる。

何となく、ファンの側に居たくない。

自分の理想を、俺に押しつけてくる奴らは、ファンだから。

俺は、こぶし拳を握る。

雨が、
更に、
強くなる。

「…じゃあ、俺は、何の為に此所に居るんだっ！」

ザ
ア
ア
:
:
:
:
:

雨に混じって、俺の頬から、流れ落ちた。

涙が。涙が。涙が。

苦しくなる。こんな生活、やりたくない。

ファンの奴らにチャホヤされて。

金、^{かね}
いっ
ぱい
貰
つて。

で、何も残らない。

苦しい生活から、抜け出す為に、って、役に立たない。

バカだから。バカだから。この道を選んだ。

ぼやけた視界に、何かが映った。

何かは、分からなかったから、もっと近くに寄った。

…ネコ、とかかな？

涙を拭きつつ、じっと見た。

俺は、驚いて、走って近寄った。

第二話。(後書き)

文が、下手くそですが、引き続き、お読み下さい。
感想、意見、お待ちしております。

第三話。(前書き)

すみません。「・・・」の所から、登場人物、もしくは、時間
が変わります。
ごめんなさい。表記し忘れていました。

第三話。

俺は、驚いて、走って近寄る。

「……っつ。大丈夫ですか!?! しっかりして下さい!!」
女の子……だった。

俺は、ゆっくりと抱き上げる。

予想以上に、軽い。

そして、熱かった。

「助、けて……」

そう言っ、俺の手を握った。

…えっ。

俺が、握り返すと、ギュウツと握って、力が無くなった。

「えっ。だ、大丈夫ですか!?!」

何度も揺さぶったけど、起きそうに無かった。

グツタリとしていて、苦しそうに喘いでいる。

尋常じゃない熱に、怯え乍ら、携帯を取り出した。

“119”

プルル……

…あつ。繋がった。

「すいません。東京・@@・¥¥まで、お願いします」
慌てて早口で言った。

正直、気が動転していた。

「分かりました」

其の人は、冷静にそう言っ、

「直ぐに向かいます」

と、言っ。

俺は、ホツとして、屋根のある所まで走っ、この子を寝かせた。

…だっ、身長的に、俺より二つは年下に見える。

やっぱり、へこの子だ。

・ ・ ・ ・ ・

此所は、病室。

点滴をして、スヤスヤと寝ている。

ぐっすりと寝ているこの子を見て、ホッとした。

同時に、ドキッとした。

じっくり見ていなかった、この子の顔。

ショートのが、似合っている。

第四話。(前書き)

暫く、二人だけだと思ひます。
名前も、徐々（じょじょ）に分かつてきます。

第四話。

じっくり見て居なかった、この子の顔。

ショートの髪が、^{かみ}似合っている。

頬は、ほお柔らかやわかそうに、プックリしている。

リンゴ
林檎色に染まって、
余計に……可愛い。

真ん丸い瞳。ひとみ
きつと、目を開けると、そうなのだろう。

前髪を結んで、横に垂らしている。

ゴムに、ピンクと赤のハートが付いている。

…にあ
似合っている

服も、チェツクのワンピースで、黒とピンクだ。

……デートだったんだろうか

そんな事を、考えてしまう。

知らない内に、この子の彼を想像して、嫉妬している。

ブンブンツツ

慌あわてて頭ふを振ふって、其そのの事ことを追おい出です。

「……俺は、バカか」

そう言い乍^{なが}ら、赤くなる俺。

「あー。やべエ。歌の練習、しておかないと」

声に出して、練習し始めた。

[illegible]

私は、ユメ：みたいな物を見ていた。

「……あ、れ？何か、聞こえてくる」

そう^{つぶや}呟いて、
耳^すを澄ました。

“僕はそつと写真を見つめる

ホコリ
埃かぶって

セピア色になって

それでもまだ
笑いかけている”

「あ……」

私は、この声に聞き覚えがあつた。

：助けてくれた、声だった。

子供みたいに、声変わりして無い声。

だけど、大人の声。雰囲気が。

気持ち良い、声。もっと、聞いていたい。

第五話。(前書き)

歌が、入りますが、下手なので（そこんどこ）御了承ください。

第五話。

“二人で 写った 笑顔の瞬間
日を 浴びること無く
暗い中で 過ごして
僕の 心もそうだ……”

私は、泣きたくなつた。

声が、悲しくて。

憂いが、混じって。

…泣きたいよ……。

“君を ホンキで好きだった あの日
誰かが 囁いて
あの時が 始まる”

だんだん、声が遠ざかっていく。

私が、遠ざかってるだけなのか、よく分からない。
けど、そんな事、気にしてる余裕0。

……えっ。待って。行かないで。

私は、必死に追いかけた。

走って、走って、走って。

其れでも、追いつかない。

“君は 又 もう一度
願いますか

『あの頃へ 戻りたい』と

私は いつも 祈っています

『君と 歩きたい』と”

私の声が、聞こえた。

こんな声、自分でも知らなかった。

私の声じゃない、声だった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

光が、目の前で炸裂した。

眩しすぎて、目をギョツと瞑った。

光が和らいだ、と思うと、直ぐに眩しくなった。

私は、観念して、目を開けた。

眩しさに慣れず、何も見えないまま、歌っている彼に、声をかけた。

とても、気持ち良さそうに歌っているのが、ありありと分かる。

「歌っているのは、貴方ですか？」

第五話。 (後書き)

いやゝつ。すいません、インフルエンザで寝込んでたんですよ、今まで。

ごめんなさい、物凄く期間開きましたね……… (汗)。

此からは、土日だけになりそうです、更新。
ヨロシクお願いします。

第六話。

「えっ!?!?…聞いていたんだ…」

彼は、驚いていた。

私は我慢できずに、目を瞑つぶった。

目の前に、赤くなった彼が見えるようで、笑ってしまった。

「…クスクスッ」

「わ、笑わないでよ…」

やっぱり、明るい声だ。可愛いとも、思える。

私は、ゆっくりと目を開けた。

まだ、眩しかった。けど、彼は見えた。

キャップは取っていて、少しツンツンした茶髪。

整った顔立ちは、文句の付けようが無いほど、綺麗だった。

少し吊り上がり気味の目も、薄い唇も、スツと通った鼻筋も。

耳には、ピアスを三つして、似合っていた。

格好、良かった。

「…良かった、無事で」

彼は、優しく微笑んだ。

其れは、心の底から笑ってくれていた。

歌声のトキの、憂いは無かった。

「助けて、くれたんですね。ありがとうございました」

私は寝たまま、礼を言った。

私は其れに気付いて慌てて起き上がる。

…失礼すぎるよ、私。

「あっ。止めた方が…」

彼は、そう言うけど……。

そう思っていると……

ズキンッ

頭に、響いた。

後頭部を殴られるようで。

脳が、締め付けられるようで。

私は後ろに倒れ込んだ。

「うわっ。危ないよ」

彼は私を受け止めてくれた。

頭を、抱えてくれた。

「……あつ。すいません…」

「すいません、か…。ねえ、危なかったんだってよ？え、っと……」

私は、自己紹介をしていなかった事に気付いて、慌てて名前を言った。

「う、『海原^{うなばら} 南奈^{みな}』です」

第六話。(後書き)

ごめんなさい!!

色々ゴタゴタありまして……。

私の、片思い中の男子がですね…引っ越すらしくて……。
精神的に落ち込んでいて無理でした……。

っと、こんなの言い訳ですね。

今日は二話連続で投稿いたします!

こんな私ですが、今後とも宜しくお願いします! m (?) ? m

第七話。

「南奈：ちゃん、じゃ、馴れ馴れしいか。：海原さん」
私は、少しがっかりした。

：名前で、呼んで欲しかったな：。

「風邪。ひいてるのに、雨に打たれたんだって？」
彼の瞳が、少し厳しくなった。

：え。

「お陰で、肺炎にまで拗こじらせてるよ。長期入院の、一歩手前だって」
今度は、泣きそうな顔になって、言った。

：え。

「死んじやうかと思った……」

彼は、泣き出して私に抱きついた。

：ええ！？

「…わっ。ちょっ。……大丈夫ですか？」

返事が無く、泣いたままだった。

私は、手を彼の背中に回した。

「……ごめんなさい。其所まで、心配してくれていたのですね」
此所まで、赤の他人が心配してくれたのは、初めてだった。
けど、何だか、違和感が無くて、抱きしめ返した。

頭を撫でて、髪の毛に顔を埋めた。

シャンプーの匂いが、心地よかった。

「心配させて、ごめんなさい」

名前も知らない人なのに、繋がりができた。

私は、この人を好きになる。

直感だった。

・
・
・
・
・
・
・

俺は、一目惚れをしていた。

気付いたら、抱きしめていた。

南奈のことが、好きになっていた。

……キスまでしたくなった。

「ゴメン、急に……」

「いえ。別に良いです。此所まで心配されたのは、初めてでしたから」

南奈は、首を傾げてニツコリと微笑んだ。

可愛くて、可愛くて。

本能を理性で押しつけた。

「あっ、そうです。お名前、聞いていませんが……」

第七話。(後書き)

：すみません、ボロボロですね。
次回は早めに投稿です！
これからも宜しくです。

第八話。(前書き)

光輝君目線です。

第八話。

南奈は、可愛く首を傾げた。

キョトンとした顔が、無茶苦茶可愛い。

「……っ。『星崎^{ほしざき} 光輝^{こうき}』だよ。16歳」

「あっ。そうなんですか。私は、15です」

…やっぱり、年下なんだな。

「って、この前のあの時間、学校がある時間じゃあ……」

俺は、驚いた。

今、南奈は受験生のハズだ。

勉強は、サボっているのだろうか。

…頭悪そうにも見えないけどな…。

「フフッ……。其れはお互い様ですよ、星崎さん」

…うつ。そりゃまあ、そうだけど……。

俺は、自分がアイドルだと言うことを、明かしたくなかった。

大体、引かれるかキヤアキヤア言われるだけだ。

でも、此所は、話しておきたかった。

「俺…。〈地球隊 EARTH〉なんだ。知らない？アイドルグループの」

「えっ……。そう、なんですか…」

…ほら、やっぱり「住む世界が違う」とか言って、俺から距離を置くようになる。

折角、打ち解けてくれそうだったのに……。

「…だからって、距離を置かないでくださいね、星崎さん。有名だし、やっぱり尋常じゃないくらい格好いいです。でも友達にくらい、なってくださいね」

南奈は、顔を上げて天井を見つめながら、言った。

遠い、遠い、目をしていた。

「…ありがとう」

俺の、折角治まったハズの涙が、零れ落ちた。

溢あふれて、溢あふれて、止まらない。

「えっ、えっ（焦）。わ、私、変な事を言いましたか？…ご、ごめんなさい」

「大丈夫だよ…。俺、嬉しい…。海原…、もういいや。南奈ちゃん」

俺は、思い切って口にした。

『南奈』 って。

「俺、そんな風に言われた事、無かった。ありがとう」

『大好きだよ』

その言葉が、口から零れ落ちそうだった。

第八話。(後書き)

行間あけてみましたが、如何でしょうか？
もしあれだったら、言ってください。
あー。久しぶりだった。

第九話

「南奈ちゃん。これから、俺と友達、宜しく。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

私は、舞い上がってしまう。

…こ、こんなに有名な人と、友達になれるなんて…。

他の人だったら、こんな風に舞い上がっちゃうんだろうけど。

私にとっては、友達が一人。出来たのと、同じ嬉しさ。

他の人と接するのと、変わらないよ。

…それに…

名前で呼んでくれたっ！

嬉しい。

光輝君から、私の名前を聞くと、違って聞こえる。

もっと、可愛く聞こえる。

あんなに格好良くて、優しくて、歌がうまくて。

皆が、惹かれるのも、分かる気がする。

私だけに、その声とその顔を見せてくれないかな、って我が儘だね。

年上なのに、可愛い一面がある光輝君。

皆に、見せたくないよ。

「…南奈ちゃん。南奈ちゃんの番だよ？」

「…えっ。」

「ほら、学校。」

「え、えと、ですね……。私、小さい頃から長期にわたって渡米していたんです。

それで、向こうの飛び級制度を利用して、大学まで卒業したんです。ハーバード大学……でしたっけ。それで、中学、行ってないんです。一度した勉強を……もう一度は一寸……。」

…ほら。やっぱり。引くんだよね、皆。光輝君も、だよね。

言われ続けてきたんだ。秀才だ、とか、天才だ、とか。

でもね、友達が欲しくて。嘘ばっか、吐いてきた。

だからかな。誰も、逆に近寄らなくなっていく。

只、友達が欲しいだけなのに。

「…俺、一寸帰るな。ごめん。」

そう言って、光輝君は、部屋を出て行った。

…光輝君も、なの…？ 私は、望みすぎなの…？

第十話。 (前書き)

今回は、最初から光輝君です。

第十話。

俺は、タクシーに乗って俺らの家に向かった。

…ニイ達、待ってるかな。

その事が、シャボン玉の様に膨らんでいく。

けど…、パチンと割れた。

やっぱり、南奈の事が、気になる。

酷い事、してしまったみたいだし。

あんな所で、抜け出すんじゃなかった…。

でも。あの空気の中。

どうやって、抜け出せただろう？

変える事が、出来ただろう？

「…南奈……」

一つ呟いたら、もう、止まらない。

南奈の事ばかり、考えてしまう。

「…さん？お客さん」

運転手の言葉に気付かない程。

考えていた。

「え、はい」

「着きましたよ？」

「あ…はい」

俺は、金を渡して出た。

外は、雪が。

沢山の雪が、降っていた。

あの雨が。

雪に、変わっていた。

俺の肩に、一粒、二粒。

落ちては、溶けていった。

白く、凍った息は、上に昇っていった。

そして、雲に。吸い込まれていった。

・
・
・
・
・
・
・

「なあ、おい。聞いてんのか？」

「おい。光輝くーん？起きてますかー？」

「おい。目え醒ませ」

「無理だねー。異世界にトリップしてるー」

「えっ！…マジで」

「…だろうな」

ニィ達が、勝手な事を言ってる。

けど、思考をそっちに回す余裕が無い。

南奈の事で、頭がいっぱいだった。

【最初が、『峰柳 緑』。

次が、『空波青太』。

その次が、『雪原麗治』。

これが、俺のニィ達。】

第十話。(後書き)

きました、ニィ達登場!!

：けど、キャラが：／（＞0＜）／たーすーけーてー!!
って事に……。

頑張ります！

第十一話。

「……ごめん。にい達」

俺が、にい達を困らせている事に気付いた。

すると……

「わっ。…生きてた」

…真面目に驚かれた。

「……ごめん。ふざけないで、緑にい」

俺は、躊躇した。

南奈の事、話して良いのかどうか。

けど、話さずに、席を立った。

「…俺…。寝てくるよ」

そうか、おやすみ。

なんて、言ってくれるような、にい達じゃない。

「おい、待てよ。光輝」

…やっぱり、緑にいが引き留める。

俺は、半ばウンザリした顔で振り返る。

「悩んだままだと、眠れねえぞ…。…話せよ」

「…いやだ」

にいは、にやにやして目の前に立っている。

…つくそ。

「…………どうせお前。〈恋〉してんだろ」

麗治にいが、真面目な顔を崩して言った。

…ファンの奴らが見たら、ショック受けるどころか失神するぞ。

それくらい、きm…………雰囲気が変わっている。

「ち、違うしっ!」

…ムキになって否定したのが、悪かった。

「俺らの方が、恋愛の先輩だぞ?」

「俺も聞きたーい、聞きたーい」

いつもは俺の見方の、青に今まで、にこにこして…、裏切る。

「……………」

俺は悔しいけど…反発出来ない。

……全員、年上だし。 緑Ⅱ 18 青Ⅱ 17 麗Ⅱ 19

第十一話。(後書き)

…遅くなってごめんなさい…。

更新を早めにしていきます！(出来るだけ…)

ので、今後もヨロシクお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0571q/>

私の初恋。

2011年10月8日14時55分発行